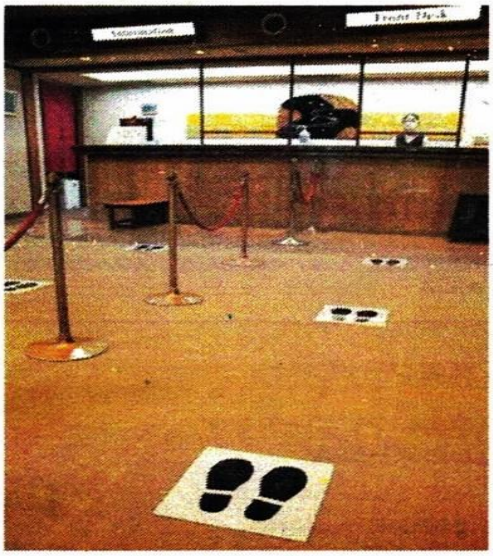
讀賣新聞 オンライン

県外客受け入れへ　往来自粛あす解除　檜枝岐は休業続く

2020/06/18 05:00



フロントに列の間隔を示す足形を置いた旅館（１６日、会津若松市の「原瀧」で）

檜枝岐村の公園の入り口には「村民限定」の貼り紙が登場した

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて続いていた東京など５都道県との往来自粛要請が、１９日から解除される。県外客の呼び込みも始まることから、観光地では受け入れ準備が着々と進む。イベントの開催基準も緩和され、いよいよ県内の経済活動が本格的に動き出す。

「会津の奥座敷」と呼ばれる会津若松市の東山温泉では、臨時休業していた旅館が順次営業を再開。１９日からは「御宿東鳳」「今昔亭」の２館が再開する。今昔亭は今月いっぱいは金・土・日曜に限り営業し、全面再開は７月からになる。

東山温泉観光協会副会長も務める今昔亭の平賀茂美総支配人（６５）によると、例年の東山温泉の宿泊客は約６割が首都圏から。「休業がこれ以上長引いて書き入れ時を逃せば、経営基盤の小さい旅館は体力がもたない。自粛解除で、一日も早く元のように往来できる状態になるといい」と期待する。今のところ予約は県内や近県の客が中心で、首都圏からの客足の回復は「２　３か月はかかる」とみる。

今昔亭は当面受け入れ定員を半分に減らす。フロントに飛沫（ひまつ）感染を防ぐ透明板や、客が並ぶ際の間隔を示す足形も設置。ただ、東京では今も新規の感染確認が続く。平賀さんは「不安がなくなるわけではない」と語る。

◇

一方で、１９日以降も観光客を受け入れない自治体がある。人口約５３０人の檜枝岐村は今月末まで村内の宿泊施設や飲食店、観光施設の営業自粛を継続する。

「村民限定」。尾瀬に咲く草花が楽しめるミニ尾瀬公園の入り口には、こんな貼り紙が掲示された。平野勝観光課長は「観光業が主体の村だが、いまは村民の健康が優先」と説明する。

尾瀬への玄関口となる御池駐車場の開放とシャトルバスの運行再開も７月１日から。ミズバショウの見頃は観光客を迎えられない。

「旅館ひのえまた」の橋大和代表（４８）は「シーズンが始まるいい時期に客を泊められないのは悔しく歯がゆいが、ともに暮らす村民のためを思うと、踏ん張らないといけない」と語る。７、８月に入っていた団体予約も取り消しになった。「７月以降、客が来る保証はない。どれだけ戻ってきてくれるか……」。新そばとキノコが旬となる秋に望みを託している。